

平成27年度（第42回）
岡山県老人福祉施設
職員研究発表会
助言・講評

期日：平成28年2月17日（水）
場所：コンベンションセンター
元川崎医療短期大学
教授 内田富美江

演題 1 : 「お帰りなさい」 雄神安全パトロール隊

○利用者の約4割は元気高齢者⇔QOLをどう支援するか？
何か目的があれば心が動く⇒充実感・満足感・生きがいへ

○パトロール隊参加高齢者4名に現れた効果

- 「役割をもち外出」したこと➡子どものために役立つ
- ➡地域住民と相互交流の機会となり福祉教育に貢献した
- ➡利用者の「エンパワメント」支援である（重要！）

＝社会的存在としての利用者の持てる力を引き出すことは利用者支援の根幹である。

❖ホームに入所していても身近な地域の中で役割があり、地域住民から感謝され認められる（承認欲求の充足）

- ➡生活の張りや生きがいの獲得へ（人として生きる意味）
〈課題点〉

・**効果検証をする**：パトロール隊以外の人への波及効果、般化、満足感指標など用いる→課題は具体的に示す

演題2:人をつなぐ食卓

◎問題意識が明確、現状分析力(+)、レベルの高い研究

- ・「生活の一部としての食事支援」へ多職種で見直す
- ・食事の目的を「個人の強みに目を向け、主体的で生活の息づかいを感じられるもの」とした視点が素晴らしい。
- ・栄養士が利用者の「人となりを知る」ため「24時間シートやICFシート」使用、多角的アセスメントしたプロセスが良い→生活機能、環境改善に目を向けた⇔利用者の潜在能力、ニーズ発見に至る（ICFは個々の強みを活かす支援）

食事の支援は、買い出しから始まる（食いたい物について話し選ぶ⇒店を選ぶ⇒買い出しに外出⇒作る⇒食べる）

* 重要「エンパワメント支援」・自分で考え、選び、決め、実行する→地域で暮らしを営む姿

- ・効果検証→メンタル指標を用い科学的検証をしている
- ・ケア視点の変化：立ち位置が利用者側になっている
- ・自立支援（選択・決定）、内在する能力引き出す食支援

演題3 内職活動から学んだこと

- ・利用者像：自立35%、要支援21%、要介護1・2:40%
- ・約半数が認知症、自身で時間を有効活用できずトラブル続出
- 「軍手の内職」導入により得られた効果
 - ・見通しがもてる単純作業のため、工程が分かりやすい
「取りに行く⇒検品⇒糸切り⇒結束⇒袋詰め⇒納品」
- 利用者自身の評価として
 - 時間を有効活用できるようになり、他者と楽しく仕事、工賃ある
好評価→なぜか？
高齢者にとって大切なこと
 - ☞ 自己肯定感、自信(まだできる)、人の役に立てる、プライドを
もてる役割がある、報酬がある
- ◎介護職の「利用者」観変化へ☞社会的存在としての人間として
対等に向き合うことを学ぶ ☞ 日常支援の在り方を考え直す

演題 4 申込み待機者・入所者実態から・・・

福祉施設の在り方が社会から問われている時代である。

- ・ 地域の介護拠点として信頼され、選ばれる施設となるため求められていることは何か、向き合い取り組んだ。
- ・ 申込者減少・待機期間減少→近隣施設増・競走・悪循環⇒介護の質を向上する組織的取り組み（個浴、介護力、接遇委員会等）⇒効果がまだ見えない

【検討課題】

❖ 地域の介護ニーズをリサーチ（把握）する

職員が考える期待 ≠ 住民の期待

住民はどのような特養を望んでいるのだろうか？

❖ 施設内の介護、住民は知らない⇒「見える化」する

- ・ 取り組みを積極的にPR⇒内容を地域に知らせ共感を得る
- ・ 地域に開かれた施設へ☞信頼・・地域交流スペースの活用⇒地域貢献してこそ社会福祉人☞社福法人の役割、専門性を地域にshareする：介護講座等無料で実施）

❖ 職員の意識転換がますます必要な時代になっている

演題5 入所者と地域住民との親睦と交流を図る

- ・施設内行事への住民参加

⇒利用者の楽しみ・生きがい

- ・利用者の要望を聞き行事設定（素晴らしい）

○行事がもたらす効用、施設が地域住民との交流の拠点となる、地域の子どもと交流

【検討課題】

- ❁行事☞利用者がお客様にならない工夫必要

“楽しみ”がること☞生活意欲は向上する

やって貰う（受け身）VS 自ら行う（主体的）

- ❁地域交流から町づくりへ

イベント型から日常的ふれあいへ

ソーシャルインクルージョン

* 例：地域の趣味サークルに入る等

演題6 人材から人財へ 育成・定着を図る取り組み

○人材育成は介護業界で特に重要な課題

何をどのように行えば、人材が定着するのか

☆現状調査・分析後、改革に着手

☆「“いいね”システム」は素晴らしい

ポイント制やgood job賞、よいことを見つけ誉める

⇒ポイント制や賞の授与☞人間が本来もっている承認欲求を充足させ、自己肯定感が向上する

☞モチベーションがup☞介護人材が定着化に寄与

☆コミュニケーションノートの活用

☆職場外交流・・楽しいことへの投資

◎職員の目に見えない姿を積極的に評価し、人への投資を惜しまない☞成果へと結実している

演題 7 安心と笑顔の町づくり

「さいわいコミュニティで」安心・住み心地がよい馴染みの関係づくり

○介護予防、花や野菜づくり、リハビリ（運動・音楽）・・楽しみの演出プログラム多い、やりたいことがやれる満足感

【今後の課題】

地域に開かれた「さいわいコミュニティづくり」

- ・住民主催の趣味サークルに入り地域の方々と活動を共にする

- ・地域のためになることを実施する

花の栽培を地域にも（保育園等に持参する等）

- ・人生の最後は社会貢献が大切。誰かのために役立つ喜びと充実感が高齢者に必要

演題 8 : **特養** できたてをどうぞ

テーマ 「家庭に近い食事環境」を実現する

◎施設の食事＝「給食」の概念を破る試み👉プロ意識が高い実践である

○食事ができる過程を大切にしている

“もうすぐご飯” “今日は何だろう？” 期待感を高める演出👉匂い、音、生活感、食欲

○作る人と食べる人の関係性を「親密性高く」へ

○食べる人の様子を見守る距離間を築く

○できたてをおいしく食べる環境整備へ

キッチン環境、献立、多職種協働で動く

❖食と人間の関係性を探求、深く考えた実践
細やかな配慮と利用者への愛が感じられる

演題 9 生きる力となる ハッスルクラブ

問題意識（＊）が明確、原点に戻り、楽しみ・生きがいを再考、再構築したプロ意識が高い研究

＊「人は何に対して生きる意欲が出るのか」熟慮

👉 自ら何かに向け、自主的に踏み出す

👉 主体性をもち参加するクラブづくりへ結実

①導入：事前に掲示、話題性アップ（ワクワク感）

②充実感：完成まで個別フォロー（手厚い支援）

③意欲を引き出す

作品発表・自己実現（賞賛・承認の場設定）

結果：情緒・生活の安定👉退所者減、トラブル減、

ヒヤリ減、面会増、話題増・活気づく

❀エンパワメント：その人の持てる力を引き出す
どの人も潜在能力がある、人への信頼が前提

演題10自然な排便コントロールをめざして

テーマ：重介護者の便秘→薬剤ではなく介護職が基本に即して自然排便へと移行させた取り組み

- ・便秘解消条件

排便リズム、水分摂取、運動、繊維質食品

○事例検討から見えてくること

年月かけ地道に原則に即したケアを実践

【今後の課題】

- ・課題に掲載した項目は同時に実行すべきこと。
- ・なぜできなかったか？

実施前の介護計画に盛り込まれていない

再アセスメント時に盛り込むのがプロの支援
→ざっくりした印象、アセスメントに課題あり

演題11：多施設連携による水害避難訓練

○何時発生するかわからない自然災害、防災訓練は利用者の安全確保のため喫緊の課題

本研究：行政が指定した避難所→利用者に不適合
どうする？→法人内事業所同士連携・合同訓練

- ・避難場所まで100m→河川氾濫時2m洪水予想
避難時間45分→車移動可能？ 安全か？

❖近年の洪水「あっという間に水かさが増えた」

- ・認知症利用者の避難場所として最適な場所が一次避難場所として最適かどうか悩ましい課題あり

❖まず生命の安全、次に避難生活継続への対応

- ・避難時間短縮→日頃から地域住民との防災訓練に関する協力関係の構築が大切

演題12：座位姿勢を見直す

事例（円背、横倒れ、言語伝達困難）

「座る」を見直す⇒シーティング理論⇒訴えのない利用者の真のニーズに気づく：生理学的視点に基づく苦痛緩和と快適な座位支援へ：科学的論拠

- ・ 初期アセスメントや経過をPTと共有、文献適切
- ・ 検証と改善点：車いす（端座位の評価等）、骨盤サポート（骨盤起こし）、アームサポート、バックサポート、フットサポート（体圧分散）

→座位姿勢保持には、これだけの要素が含まれる

❀ きめ細かい記録による変化の確認と生理学的視点に立脚した支援

◎介護職が実践する「安楽な姿勢保持」支援として重要な実践

全体を通しての講評

○施設種別と研究演題の特徴（12本）

- ・ 特養(6)食事、排泄、姿勢、運営管理
- ・ 養護(3)地域交流、社会参加、役割、自己実現
- ・ 軽費・ケア(3)町づくり、防災、趣味・自己実現
 - ☞ ケア対象状態像により支援目標が異なる
 - ☞ 施設機能、職員に期待される役割も異なる
 - ☞ 当然、社会から期待されるニーズも異なる

変わらない事

❖ 日本の福祉が向かっている方向（現在～未来へ）
ノーマライゼーションからsocialインクルージョン
（社会的包摂）へと進んでいること

地域住民の一人として「普通に暮らす」方向へ

⇒利用者も日頃から「お世話になる」暮らしから、
地域の役割を担う人へ（できること）☞喜び・充実感

❖各発表とも、今の時代に自分たちは何をすべきか考え社会のニーズに応える姿が伝わってきた。

○利用者の「主体的な生活」とは何か考えた研究

自立的な生活の模索⇔栄養、クラブ活動

立ち止まり（ポーズポイント）「生活支援」の原点に戻り「その人の生活」を問い直した力作

○事例研究では

・利用者個々の安寧・楽しみ・充実した日々のため、科学的根拠ある実践を積み重ねた⇔他施設に般化できる、エビデンスに基づくケアは評価が高い、継続を期待

○栄養部門では2題とも優れた研究

「その人の強みを支援」ICF・24時間シートを栄養士のアセスメント力、多角的視点からケアへ、視点も企画力も客観的な検証も加え素晴らしい

○地域交流：何をもって地域交流とするか

- ①楽しみな取り組みが始まっている
- ②施設で完結しない視野の広い生活支援の在り方模索する
 - ・向かうべき方向は、障害の重さに関係なく施設コミュニティ充実からソーシャルインクルージョンへ
- ③地域住民と顔なじみになり、ニーズを知る

○管理部門：社会福祉法人が為すべき課題が変化している

- ①人材育成と定着化、強みを評価し人材への投資
- ②非常時や自然災害へのリスクマネジメント力の強化
- ③施設間の競争と生き残りと社会貢献
 - ・制度依存ではなく、山積している地域の課題を住民とともに解決していく姿勢が求められている。
 - ・施設介護の質の向上及び地域貢献が生き残りかも

人生を輝かせる3つの要素

障害のある人も、認知症高齢者も、定年退職者も、若者も

役割をもつ

“私は〇〇し
ないといけない”

「あなたが必要」
必要とされる⇒
生きる上で重要

責任をもつ

役割を果たす
任されている

**やりがい、充
実感**に繋がる
⇒生きるため
に重要

誇りをもつ

人間としての
プライド

その人なりの
役割・責任があ
る→**自信をもっ
て**生きられる

利用者のみならず、人材育成にも活用可能
潜在能力を引きだす、明日への希望⇒充実した生活